

——嗚呼、渴く……喉が、渴く……。

こんな夜は、堪えようのないくらい。

他の何をもっても埋めることができない、欠落感。

喉の奥がチリチリと焼かれていくような、飢餓感。

「う、くう……あうう……」

そんな、自分ではどうしようも出来ない感覚に悶えながら、自分の身体を抱いて息を漏らす。

知らず肩は震え、ベッドから立ち上がろうとして、膝が崩れた。

「あう……はあ、はあ……」

自分のものとは思えないような呻きと共に開かれた口から、だらしなく涎が滴り床を濡らす。

ああ——私はもう、こんなにも欲してしまっているんだ。

「はあ、はあッ……う、おおお……」

心の奥底にいる私がそれを肯定し、熱く吐息する。

それはまるで、飢えた獣のようで。

その獣が暴れだそうとするのを、私はただ必死に押さえ込むことしかできない。

しかしそれだって、いつまで持つのか、いつまで私が『私』でいられるのか、私にだってわからなかった。

欲しい……欲しい、欲しい、欲しい……。

繰り返し訪れる衝動は、やがて私を内側から喰い破り、求めるままに貪るだろう。

それはそれは、とても甘美な瞬間となるだろう。

けれどそれは、まだ今は『人』でいられている私にとって、最も悲傷を伴う記憶となつて、永劫苛み続けるだろう。

なにより、彼を喪うなんてことは、考えただけで気が変になりそうになる。

——本能の歓喜からか、理性の悲哀からか。

「う、うっく……ナオ、くん……………」

零れた涙が涎の溜まりに落ちて、ひとつに混ざり合っていた。

## §

キーンコーン、カーンコーン……。

けたたましく鳴らされる終業のチャイムが、校内に響き渡る。

「……それじゃあ、今日はここまで」

少し残念そうな響きがある教師の言葉を受けて、級長が号令をかける。

教師が教室を後にすると、わっと堰を切ったように放課後の喧騒があふれ出してくる。

「ふー、今日も終わったなあ……」

そんなガヤに混じって、俺も一日の疲れを吐き出すように、大きく息を吐いてみたりする。

「よう、おつかれ」

そのまま机に突っ伏してしまおうとしたところで、ポンッと後ろから肩をたたかれ振り返る。

「ああ……篤志か。おつかれ～……」

相手の顔を確認した俺は、ヒラヒラと手を振りながらそのまま机めがけて倒れこんでしまう。

「どうしたよ？ ずいぶんお疲れみたいじゃねえか」

「ん、ああ……徹夜でゲームやっててな。寝てないんだよ……」

我ながら情けない理由だと思うが、面白くてついついのもり込んでしまって、気がつけば家の前でスズメがさえずっていた、という次第だ。

そんなふうに熱中させるゲームが悪い……なんてことは言うつもりはさらさら無いけど、まあ理由には違いない。

「そんなに眠いんだったら、授業中にでも寝てればよかったら。今の田代の授業なんか、絶好の睡眠タイムだったろ」

「バーカ、俺はお前みたいにいつでもどこでも眠れるってわけじゃないんだよ」

田代先生による現国の授業は完全にマイペースで、生徒が聞いていようが聞いていまいがどんどん進めてしまう。

おかげで午後に行われる現国の授業は、終了間際ともなると半分以上の生徒が机の上に突っ伏してる有様だ。当然、その大多数が男子生徒なわけだけど。

見れば篤志のまぶたもどこか寝起きのように腫れぼったく見える。おおかたコイツも寝てたんだろう。

「んで、なんの用だよ？」

「ああ、そうだった。お前このあとヒマだろ？ 帰りにゲーセンでも寄っていかねえか？」

「…………お前、俺のこのザマみて、ゲーセンなんて行く元気があると思ってるのか？」

「ん？ まあ、お前の元気かどうかなんてのは関係ないんだけどな。ヒマなら連れてくだけだし」

「帰る」

身の危険を感じ、慌てて席を立とうと、

「逃がすかっ！」

……したところで、肩を掴まれ強引に席に押し戻された。

「っ……な、なにすんだよ……」

「お前、昨日もなんだかんだ理由つけて逃げたじゃねえか。今日はつきあってもらうぜ？」

なんだその不良学生の絡み文句みたいな口上は。

「……はあ。わかったよ、少しだけな」

「オッケーオッケー。今日こそフルボッコにしてやるから、覚悟しとけよ！」

弱ってる俺を倒して楽しいのか、という言葉を読み込みながら、俺は二度目のため息を、深く吐くのだった。

## §

「……………疲れた」

何回目かのテンプレート的なセリフを、連行されたゲーセンからの帰り道に吐き捨てる。

篤志のやつ、少しだけって言ったはずなのに、結局こんなに暗くなるまで付き合い合わせやがって……。

まあオレの方も、最初は軽く遊んで終わりにするつもりだったんだけど、少し負けが込んできたところで熱くなってしまったのが悪かった。

おかげで財布はスッカラカン、頭も足も疲労と眠気でフラフラだ。

今なら自分の部屋に到着次第、ベッドに倒れこんで朝までグッスリの自信は100%超だ。

「……眠い」

本能の眩きだった。

まっすぐ歩いていると思うのだけれど、何故か家々の壁が俺のほうに迫ってきているのは、気のせいだろうか。

寝てない自慢っていうのはあまり好きじゃないんだけど、かれこれ40時間は寝てないとなると、さすがにイロイロと不思議なものが見えてくる。

たとえば、急に目の前に女の子が出てきたり……。

ドンッ！

「きゃっ……！」

その女の子とぶつかってみたりするわけだ。なんだこのゲームみたいな展開は。俺のひそかな願望だったりするわけか？

「……ん、おお？」

身体に響いたわずかな衝撃に、ハッと我に返る。

視線を下に向けると、街灯の光の間を縫うように広がる夜闇の道路に、さらに黒を濃くしたような小さな塊があった。

「いたた……」

驚くべきことに、その塊からは人の声がした。しかもなんとも可愛らしい、まるで女の子のような声だった。

……いや、ゴシゴシと目を擦ってから再びその黒い塊に目を向けると、それはまさしく、女の子そのものだった。

「え、あ、その……だ、大丈夫……？」

わずかにハッキリしてきた頭が、瞬時にこれまでの流れを整理して、反射的に口から謝罪の言葉が飛び出した。

つまり、眠気でフラフラになってた俺が、この女の子に気付かず……というより、気付いていながら跳ね飛ばしてしまった、というのが顛末だろう。

俺もあまり意識していなかったもので、「だろう」としか言えないんだけど。

「あ……は、はい、なんとか……」

顔を上げないまま答えると、生まれたばかりの子馬のようにヨロヨロと立ち上がろうとする、が……。

「あっ……」

身体を起こしたと思った刹那、その華奢な体躯がフラッとよろめいた。

「おっと！」

運よくこちらに倒れ掛かってきた女の子の身体を、とっさに受け止める。

ぼすん、という音と共に軽い羽のようなわずかな重量を胸に感じた。女の子の身体って、こんなに軽いものなのか……。

自慢ではないけど、こんな風に女の子の身体に触れるのなんて、それこそ数年ぶりだ。

「だ、大丈夫……？」

胸に顔を埋める女の子に、あたためて声をかける。

俺の吐息で微かになびいた髪から、ふわっとしたシャンプーの香りが舞い上がって、俺の鼻腔をくすぐった。

「え、あ……はい……すみません、ちょっとめまいがして……」

弱々しい言葉を漏らしながら、顔を上げて俺のほうを仰ぎ見る。

「……あっ……！」

俺の顔を認めた女の子の口から、驚き……というよりは、悲鳴に近いような声上がる。

「あ、あのっ……ごめんなさいっ……！」

次の瞬間には、戦き後ずさった後、まるで逃げるように女の子は駆け出していた。

「えっ？ あ、え……ええっ？」

一方俺は、わけもわからずその場に立ち尽くすばかりだった。

「え、えっと……俺、今なんかヘンなことしたっけ……？」

たしかに女の子に抱きつかれる感触を『気持ちいい』だとか思ってしまったのは確かだけれど、思うぐらいは許して欲しいと思うわけだ。男の子だもの。

胸に残る女の子の身体の重みと、鼻に残る軟らかな香りが夢でないことを確かめながら、去り行く少女の後姿を見やる。

「……………あれ？」

ふと沸き起こる、強烈な既視感。

——いや。これは既『視』感ではない。

この感触も、この匂いも、あの後ろ姿も、どういうわけかわからないけれど、俺はその全てを知っている……ような、そんな既知感だった。

「なんで、こんなこと……」

そう思った頃には、もう胸に残っていた感触も、鼻に残っていた香りも、そして彼女の後姿さえも、まるで夢幻のように俺の認識から消え去っていたのだった。

## §

「よう、直樹。昨日は悪かったなあ、無理やりつき合わせちゃってよお」

翌朝、俺が自分の席に腰を下ろすなり、そう言いながら篤志が俺の机に寄ってきた。

なんとまあ、ずいぶん機嫌の良さそう。昨日オレにボロ勝ち出来たのが相当楽しかったらしい。

「ああ……いいさ、別に」

朝っぱらから煽られてイラッとしつつも、ここは大人の対応。

しれっとした態度で言葉をいなすと、そのまま顔を背けて始業の支度を始める。

「ああ、悪かった。スマンスマン。つい、な……」

「気にすんなよ。たまにはお前にも華を持たせてやらないと、こっちがいたたまれない気分になってくるしな」

「ッ……い、言うじゃねえか。次はガチで負かしてやるから、覚悟しとけよ！」

ま、このくらいは言い返してやってもいいだろう。やられっぱなしというのも、やっぱり癪だからな。

しかし、『大人の対応を』っていうのは実は俺が強く言い返さなかった理由の半分だ。もう半分は、というと。

「……なあ、直樹。なんか昨日の帰りより疲れきってるように見えるんだけど、大丈夫か？」

「ああ、まあ……お前が昨日散々に陵辱してくれたせいで、寝不足なんだよ」

「ちょっ……！？ ば、ばかっ、ヘンな勘違いされるようなこと言うんじゃねえよ！」

気持ち大きな声ではっきりと『陵辱』と言ってやったおかげで、近くに居た数人には聞こえてくれたらしい。

男連中からはニヤニヤとした野卑な笑みが、女子からはまるで汚物でも見るかのような蔑みの眼差しが、篤志……と俺に注がれる。いわゆる自爆テロってやつだ。

「……ったく。バカなこと言うんじゃねえよ」

「間違っていないだろ。昨日のアレは対戦じゃなくてただの陵辱だ」

目が霞みまともにコマンド入力さえおぼつかないオレのことをサンドバッグよろしく連続技の練習台にしてくれたお礼は、今度きっちり返してやるとしよう。

……などと言って篤志の話を濁したが、もちろんそれが本当の理由なんかではない。

篤志なんかにボコボコにされて腹が立ったのは間違いないけれど、それも帰り道の途中ですっかり吹っ飛んでしまった。

そしてその吹っ飛んだ理由も、今朝の俺が篤志に言われるほど弱っているのも、同じただひとつの出来事が原因だ。

昨日の帰り道で出会った、あの女の子。

あの子のことがどうにも気になってしまい、家に帰った後もなかなか寝付けず、結局明け方の2時間程度しか睡眠を取れていない。

目覚まし時計にたたき起こされて、呼吸と大差ない回数のおくびをかましながら、どう

にかこうにか学校にたどり着いた次第だ。

それに追い打ちをかけるかのごとく、本日一発目の授業が田代先生の現国ときたからもう堪らない。

昨日は篤志のことを散々に言っていたけれど、さすがに今日は俺も早々にリタイアして、自席で舟をこぐことになりそうだ。すみません田代先生、俺にはきっと耐えられません。

さて、じゃあ今日の授業のノートは誰に見せてもらうべきか、なんてことを考えていると、担任の大岩先生がいつものごとくビシッと決まったレディーススーツ姿で、教室へと入ってきた。

「きり一つ、礼」

級長の号令と共に、また新しい学生生活の一日が始まる。

「さて、急な話でみんなには申し訳ないと思うんだけど……」

そう前置きしてから一呼吸置いて、大岩先生は言葉を続けた。

「今日からこのクラスに、新しい仲間が増えることになりました」

ざわ……ざわ……。

一気に色めくクラスの空気。

「この時期に転校生かよ」

「男お？ それとも女あ？」

そんな声が教室内のあちこちから沸き起こる。まあ、転校生を迎えるクラスの反応なんでものは、こんなところだろう。

「はい、静粛に！ 橘さん、入って」

「はい」

先生が廊下に向かって声をかけると、凜と鈴音のように響く声が返ってきた。

そして教室のドアが開く。

「ッ……おおおっ……！」

一瞬息を呑む間があり、それから男子から歓声とも雄叫びとも表現できそうな声が上がった。

教室に入ってきたのは、一人の女の子だったからだ。

「橘さん、自己紹介を」

「はい」

女の子に進行を促しつつ、先生は黒板に彼女の名を書き綴る。

「橘美月（たちばな）です。よろしく、お願いします」

形式どおりの挨拶とともに、ペコリと頭を下げる。

「橘さんは昔、このあたりに住んでいたことがあるそうよ。もしかしてこのクラスにも、知ってる顔がいるんじゃないかしら？」

そう言われた彼女は顔を上げ、見つめるクラスメイトたちの顔を見渡す。

「……いえ、その……この町にいたのは、幼い頃だったので……」

「そう。じゃあ顔なんか変わっちゃってて、わからないのかもしれないわね」

何を期待してたのか、ちょっと残念そうに先生が肩を落とす。ゲームのやりすぎじゃないですか？

「……………」

そんなことを考えながら転校生のほうに視線を向けると、不意に視線がピタリと合った。

(えっ……?)

あの転校生——橘って子、俺のほうを見てた、のか？

その邂逅も、次の瞬間にはふいっと視線を逸らされてしまった。というより、ごく自然な動きで俺の向きから目線が外れた、というべきか。

(偶然、か)

まさかね。なんで転校生が俺のことなんて見つめないといけないんだよ、と。それこそ先生じゃないけど俺がゲームのやりすぎを疑われそうだ。

「それじゃあ、席は……ああ、武村くんの隣が開いてるわね。とりあえずそこに座っておいてくれる？」

「わかりました」

先生の言葉に頷くと、並んだ机の間を歩いて、俺のところにまで橘がやってくる。

「あ、その……よろしくな」

「……………」

フランクな挨拶をした俺の顔を一瞥すると、それに応えないままに、彼女は俺の隣の机にすっと腰を下ろした。

(む、無視かよ……)

その一部始終を見ていた周りの連中から、クスクスを小さな笑いが漏れる。なんの笑いだそれは。

一軒して見た目どおりの清楚な優等生な女の子かと思ったら、とんでもない。いきなり隣の席になったクラスメイトにシカト決めてくれるだなんて、なかなかの剛の者じゃないか。

戸惑う俺の視線をものともせず、テキパキと授業の準備をし始める。用意周到なことに、教科書は一式揃っているようだ。

なんだかまるで、俺の隣に座ることも、こうして『あなたには一切干渉しませんよ』っていう態度を示すことも、全て予定調和的に決められていたかのような展開だ。

——まあ、この眠くて眠くて溜まらない状態のところきて、あれやこれや頼られてしまうという流れよりは、少なくとも俺の身体にとってはラッキーだった、といい方向に解釈しておくべきだろう。

「それじゃあ竹村くん、橘さんのことよろしくね」

そんな遺言を残して、大岩先生はそそくさと教室をあとにしてしまった。

心配しなくても、俺の助けなんかなくっても彼女は1人で生きていけるさ……。

少しずつ朦朧となってくる意識の中で、俺は再び橘のほうを振り向いた。

「ッ……！？」

(えっ……?)

橘が、俺のほうを見ていた。

視線もばっちり合って、俺の方を向いていたわけではなくて、紛うことなく『俺を見て』いた。

俺を目が合うや否や、ビクッと肩を震わせてすぐさま顔を背けた、のだけれど……。

(なんでこいつ、俺のことなんて……)

と頭を使い始めると、急激に眠気が襲い掛かってきた。

——ガラガラ。

教室の戸を、いつものごとくノロノロと開いて、田代先生が教室に入ってくる。

ああ、今はもう、田代先生の顔を見るだけで眠気が膨らんでゆく。

「……級長、号令」

先生が始業を促したその言葉が、二時間後に数学の大山先生に起こされるまでの最後の記憶になった。

## §

「しかし、マジで爆睡だったなあ。くっくっく……」

「そんな笑うなよ。本当に寝不足だったんだから、仕方ないだろ」

昼休みをむかえて、オレと篤志は購買で買い込んできたパンを囲んで、いつも通りの昼食をとっていた。

強いていつも通りでないことを挙げるとすれば、普段なら俺が篤志の寝姿を笑い飛ばしてるところなのに、今日は俺のほうが笑われてしまっている、ということか。

それから、もうひとつ。

「……………」

昨日まで誰の場所でもなかった俺の隣の席で、転校生——橘が、据わっていることぐらいだ。

退屈そうに頬杖をついて、窓の外を流れる雲でも眺めているのだろうか。

転校生にとっての最初のイベントとも言うべきクラスメイトからの質問攻めもひと段落したようで、そのせいかどこか疲れたようにも見える。

「……それで、どうなんだよ？」

そんな橘の姿を横目で眺めていると、前の席から身を乗り出すようにして篤志が顔を近づけてきた。

「どうって、なんのことだ？　ちょ、顔近いって」

「橘だよ、転校生の。なんか話したりしたのか？」

「え？　いや、別に……」

「んだよ、せつかく隣の席になったんだから、お近づきにでもなっときやいいのによ」

彼女に聞こえないようにという配慮からか、篤志はさらに口を俺の耳に近づけて、囁くように続ける。

「ほら、橘ってさ、結構カワイイんじゃないの？」

「うーん……ああ、まあ、かわいい……かなあ……」

まるで頬にキスでもされてる様な体勢のまま、チラッと橘のほうを見る。今朝に引き続いてまたあらぬ誤解を生むから、とりあえずその顔をどけてくれ。

「……………」

相変わらず橘は、さっき見た格好のままぼんやりと昼の時間を過ごしている。

改めて眺めてみると、確かに……女の子としては『カワイイ』という表現は適切な気がする。

切れ長の目に、筋の通った鼻。

どこか色気を感じさせる唇に、透き通るような白さの、何かの拍子にポキンと簡単に折れてしまいそうな細い首筋。

その肌の白さと対照的に、まるで墨汁でもつかって染色したような、深い深い漆黒の艶やかな長い髪。

ファースト・インプレッションが強烈だったせいで気がつかなかったけれど、こうしてみれば確かに……男が魅力を感じるパーツを兼ね備えている、と言えなくもない。

(まあ、だけどな……)

クラスの女子からの質問攻めには懇切丁寧に受け答えをしていたけれど、俺に対しては一貫して無視。シカト。透明人間の刑。

まだ半日とはいえ、真隣の席にもかかわらず、橘と言葉を交わした記憶は、俺にはない。

このことからわかるのは、少なくとも彼女——橘美月は、俺に対してあまり良い感情を抱いてはいない、ということぐらいか。どういうわけかは知らないけど。

「……よくわからんけど、俺には縁のない話だな」

興味がないわけではないけれど、相手にハナから拒絶されているのでは話しにならない。

「そうかあ？ 向こうはまんざらでもない気はするんだけどなー」

「……お前の目はフシアナか？」

思わず素でツッコミを入れてしまった。

「どうしてそんな風に思えるんだよ。お前だって見てただろ？ 俺がコイツに無視られたのっ」

それでもって、他の連中に混じって俺の不様な醜態をせせら笑ってただろうが、と。

「まあ……でもよ。さっきからアイツ、お前のほうをチラチラ見てるんだぜ？」

「……………はあ？」

まさか。なんで俺が橘からチラ見されなきゃいけないんだ。逆ならまだ話はわかるが。

「またまた、そんなこと言って俺をけしかけて、笑いものにする気だろ？ その手には乗

らないぞ」

コイツには以前、『あの子がお前のこと好きなんだってよ』と体育館裏に呼び出されたあげく、クラスの男子に囲まれて笑いものにされた、という思い出すのも苦々しい前科がある。

「いやいやいや、ちげえって。つーかお前、気付いてないのか？」

「なにに？」

「だーかーら！ 転校生の熱視線にだって！」

声を押し殺しつつも、苛立つようにすこし語気を強めて俺に言い寄ってくる。なんとうか、ちょっと真に迫る感じだ。

篤志とは長々というほどではないが、かれこれ4年もダベっている仲だ。その付き合いの経験からして、こういうときの篤志はウソを言っていない……と思う。

その言葉を鵜呑みにするわけではないけれど、俺は三度、横に座る橘の方を、出来るだけ感づかれないように見遣った。

「……………」

相変わらず橘は、さっきと寸分変わらぬ姿勢のまま、なにが楽しいのか外のほうを眺めていた。

「ほらみる。俺のことなんて見てないじゃないか」

「お前が偶然、転校生が見てない瞬間だけあの子を見てるだけだろ。俺からしたら、もうしょっちゅうお前のこと見てるぜ？」

「なんだそりゃ……………」

コイツって、こんなワケのわからんこと言うヤツだっただったか？

そもそもオレのことを『見てる』のだって、さっきみたいに偶然視線がオレのほうを見

ていただけ、ってこともあるわけで。

(……あれ、待てよ?)

そういや今朝、俺が夢の世界にダイブする直前に、こいつ俺のことをガン見してたような……。

キーンコーン、カーンコーン……。

そんな俺の思考を妨害するように、昼休みの終わりを告げるチャイムが響いた。

「まあ、お前が興味ないっていうのなら、無理にとは言わないけどな。少し気にしてみることをオススメするぜ」

そんな捨て台詞を残して、篤志は食べかけのパンを抱えて自分の席へノソノソと戻っていた。

(気にしてみろ、ねえ……)

篤志の遺言を反芻しながら、四度橋の様子をうかがう。

「……………」

相変わらずダンマリ。俺の視線にだって当然気付いてるはずなのに、一瞥くれることもなく、もくもくと次の授業の支度をしていた。

(こんな警戒心向き出しなヤツが、俺に気があるって? 冗談だろ)

とはいえ、この隣にやってきたニューカマーの存在がまったく気にならないのか、と言われると、当然そんなことはないわけで。

言葉を付け加えるとそれはなにも、横の少女が魅力的に感じるから、というだけのことでない。

何故か俺に向けられる警戒心。漆黒の髪。そして華奢な体躯。

これらの要素が、俺の記憶の中の何かと結びつくような気がしてならない。

まるで喉に魚の骨が引っかかっているような不快感が、彼女の横顔を見るたびにどんどん大きくなっていく。

(なんだかなあ……)

悶々とした気分を拭えないまま、午後の授業が始まっていった。

§

——放課後。

「おい、直樹一。今日一緒にゲ」

「断る」

ヤツが言い終わるのを待たずに、俺はハッキリキッパリ拒絶の意思を表明した。

「んだよお！ まだ最後まで言ってないだろ？ もしかすると、『今日一緒にゲイバー寄っ  
てこうぜ』だったかもしれないじゃねえか」

「アホか。ゲーセンよりもっと却下だ」

そもそも一応俺たちは未成年なんだから、金もってたって門前払いだろうに。

ま一、昨日の今日で篤志のヤツの天狗になってる鼻っ柱を複雑骨折全治三ヶ月にしてやるっていうのもわるくはないのだが、あいにくとまだ本調子というわけじゃない。

どうせヤルなら、全力で完膚なきまでに叩いてやりたいからな。今日のところは勘弁してやろう。

「ちえっ、まあいいか。じゃあなー」

ほとんど形ばかりに口惜しそうに言いながら、篤志は教室から出て行った。

「さて、俺も帰るかね」

学生生活一日分の疲れを吐き出すように、ほう、と息を吐いてから帰りの支度にとりかかる。

その俺の脇を抜けるようにして、一足先にと橘が、黒い髪をなびかせながら教室を後にしようとする。無論、今日のこれまでの態度と変わらず、俺のほうを見るでもないしに。

しかし、それは次の瞬間に起こった。

「あっ、きゃッ……」

短い悲鳴を伴って、橘の身体がぐらりとよろめく。

「おっと……」

反射的に、倒れかけた彼女の身体をかばうように身を投げ出す。

ぼすん、と軽く柔らかな重量感か、俺の胸に伝わる。

(あ、れ……？ この展開、どっかで……)

糸を手繰るように呼び起こされる記憶を、鼻をくすぐった仄かな香りが決定付ける。

(ッ……！ この匂い、これは……)

覚えのあるシャンプーの微香と、この感触。それが昨晚の……あの、俺が突き飛ばしてしまった少女のそれと、ピッタリと重なった。

鍵穴に合う鍵が見つかった瞬間のような、喉に詰まったものをお茶で流し飲んだ瞬間のような、そんなカタルシス。

「橘……お前……」

「ッ……！」

俺の胸に倒れこんだということに気がつくや、汚らわしい物にでも触れてしまったかの  
ようにさっと飛びのいた。

「あ……あああ……！」

怯えるような声を漏らしながら、橘は一步二歩と後ずさる。ギュッと握った拳が、プル  
プルと小刻みに震えている。

「お前、昨日の……あの時ぶつかったのは、もしかして……」

「あ、う……くっ……！」

「あ、おいっ！」

俺の言葉にビクンと身体を震わせると、床に落としたバックをひたたくって、跳ねるよ  
うに教室から飛び出していった。

「……………なんなんだよ、あいつ」

ワケもわからぬまま教室に取り残された最後の1人になった俺は、しばらくその場で呆  
然と立ち尽くしていた。

## §

翌日。教室に入ると、俺の隣の席には既に橘の姿があった。

昨日の放課後見せた怯えた表情はどこへやら、何事もなかったかのように椅子に腰掛け  
て、カバンから教科書やらを取り出していた。

「よう、橘。おはよう」

「……………」

俺の声に一瞬動きが止まるが、瞬時に華麗なスルーを決めてそのまま作業を継続する。

(まあ、そうくると思ったけどな)

昨日の様子からある程度想像できたので、俺も無理には食い下がらない。自分の机にカバンを下ろして、座席にもたれ掛る。

(しかしコイツ、なんだって俺のことそんなに怖がってるんだ?)

毎朝自分の顔は洗面所の鏡で確認するが、特別女子を怖がらせるような強面っていうわけではない、はずだ。どちらかというとなんか優男に分類される系統だと思う。

じゃあ何か。一昨日のぶつかったときに何か変なことでもしたのか?

あまりの眠気に朦朧としていたところがある以上、その可能性を完全に廃するということは出来ない、のだけれど。

少なくとも俺の記憶にあるのは、歩いていたらなにかとぶつかって、そしたら『それ』は女の子で、俺に倒れ掛かってきたかと思ったら逃げていった、ということぐらいだ。

もしその中で俺を忌避する要素があったら、しがみついた俺の身体が発する体臭が強すぎて、近寄るのも嫌になってしまった……とか、そんなことぐらいしか思いつかない。

朝学校に来る道すがら、改めて自分の匂いなんかを嗅いでみたけど、特別ヘンな匂いはしてないと思う。もっとも、自分の匂いってのは人はわからないものらしいんだけど。

まあよっぽど汗臭いとかいうのであれば、なにより篤志のヤツが『クセぞお前』なんて場所もわきまえずに言うてくるはずなので、その辺はたぶん大丈夫だと思う。てか、なんで匂いにこだわってるんだ俺は。

……だとすると、なんでコイツ——橘が、俺のことをこんなに避けようとしているのが解せない。

単純に嫌いな人種だから? つつても言葉なんてほとんど交わしてないのに、俺がどんな人間かきちんと認識しているとはとても思えない。

じゃあ何故? 思考は堂々巡りを繰り返すばかりだ。

別に橘に嫌われているっていうことについて、不満があるわけじゃない。

けどその嫌悪がどういう理由かって言うことぐらいは、知っておかないと気が晴れない。ただそれだけのことだ。

(まー、こんな風に嫌われる側が1人で考え込んでても、結論なんて出るわけないんだよな……)

殴った人間はそれを簡単に忘れてしまうが、殴られた側はそれを一生忘れない、みたいなことだ。

わからないことはわからないだし、こうしてウジウジと考え続けても仕方がない。ココは一発、直接本人を問いただして問い詰めるしかない。

(橘がそれにのってきてくれれば、けどな……)

## §

——昼休み。

「橘っ！」

午前の授業の終わりと共に教室から出て行った橘を追いかけて、階段の手前で呼び止めた。

「……………なに？」

意外にも橘は俺の声に立ち止まり、振り返って返事まで返してくれた。なんだか大きな進歩があったような気分だ。

「ちょっとさ、話したいことがあるんだけど……いいか？」

正直予想外だった反応に内心動揺しまくりで口にした自分の言葉に、3秒の間を空けて猛烈な恥ずかしさがこみ上げてきた。

(な、なに言ってんだ俺。これじゃあまるで……こ、告白でもするために呼びつけてるみたいじゃないか……)

今日の前にタイムマシンがあったら、5秒前に戻ってバカなセリフを口にしようとした自分に、渾身の力でボディブローをくわえてやりたい。

ジワジワと耳が熱くなっていくのを感じながら、橘の返答を待つ。

「……………ん、わかった」

一瞬だったのか、それとも数秒あったのか。ともかく少しの思考の後、橘はこくと頷いた。

## §

屋上のドアを開けると、少しだけ肌寒い空気が校舎の中へと流れ込んできて、思わず身震いしてしまった。

まだ季節は秋とはいえ、日を追うごとに冬将軍の迫り来る足音が大きくなってきている。

屋上には幸いにも、先客は居ないようだった。

もう少し過ごしやすい時期なら、仲のよいグループで昼食を食べに来ているような連中も見かけるのだけれど、今日はその姿も見当たらない。

まあ、それは俺にとっては好都合なのだけれど。

「……………」

橘はというと、俺の先導に素直についてきていた。

ちょっとだけ、もしかすると途中で逃げたりするんじゃないかと思ったけれど、そんな素振りみせなかった。

(別に俺のことが嫌い、っていうわけじゃないのか……?)

外と中を隔てる扉を閉め、俺は橘にと向かい合う。

さて、こうしてコイツと一対一で話し合う機会は手に入れたものの、何と言ったらいいものか。

「……それで、話って？」

第一声に迷っていた俺にかわって、橘のほうから切り出してくれた。考えてみたら、こうしてコイツのほうから話しかけてきたのは、これが初めてな気がした。

「あー、いや、まあ、その……なんだ……」

改めてこうして向かい合うと、なんと訪ねにくい話題なのかと思知らされる。『お前なんで俺のこと嫌ってるの？』なんて、本人を目の前にして言えるようなセリフじゃない。

「お、お前、さ……俺のこと、避けてる、のか……？」

ややどもりながらも、ひねり出した言葉はどうかこうにか出来る限り表現を軟らかくした問いかけだった。それでもその質問は、訊かれた相手としても答え難いものだろうなというのは俺でもわかる。

そんな俺の考えを裏切る速度で、橘の口が言葉を紡いだ。

「うん、避けてる」

「……………あ？」

そのブレの無い返答に、あっけにとられてしまう。

ど真ん中ストレートでも、それがあまりにもいい球だどつい見送ってしまう、というよ  
うな。

「話って、それだけ？」

「え、あ、んまあ……そう、かな……」

「そう。それじゃあ……」

短い言葉で会話を強制終了させると、そのままきびすを返して、鉄扉のドアノブに手をかける。

「ま、待てよっ……！」

気がつく俺は、今しがた自分のことを『避けている』と告白した少女の背中を呼び止めていた。

「……まだ、なにかあるの？」

「あ、いや、その……なんていうか……」

俺は『嫌われているのか？』と問いかけて、橘は『イエス』と答えた。俺がこうして彼女を呼びつけた目的は既に達成されているはずだった。

それなのに何故呼び止めたのか、自分でもよくわからなかった。

「……なに？ 私、お昼を食べたいんだけど」

「う、ああ……いや、それは、いいんだけど……」

別に向こうにはそんなつもりは無いのかもしれないけれど、橘の言葉一つ一つに責められているような気分だ。心なしか、俺に向けた背中に怒気のようなものさえ感じる。

なにか、なにか言わないと……。

「お、お前、さ……俺のこと、嫌い……なんだ、よな……」

無い知恵絞ってひねり出されたのは、結局質問の繰り返しだった。俺はバカの子ですか。その質問にはさっき、大変率直なお答えを賜ったばかりではないですか。

「……………」

ほら、同じ質問をされた橘だって困惑してるじゃないか。もしかすると、まったく同じ回答を繰り返して俺の傷を抉るようなまねをすることにちょっぴり躊躇いがあったりするのかもしれない気配さえある。この沈黙はまさにその証ともいえるのではなかろうか？

……などと自らの愚かさを悔いて自虐の海へとダイブを敢行しようとした俺の思考を、橘の言葉が引きもどした。

「……嫌いなわけ、ない、じゃない……」

「えっ……？」

——ぎいっ……バタン。

ギリギリ俺の耳に届くかどうかというほどの小さな声で呟くと、橘は逃げるように早足で屋上から校舎内へと入っていった。

## §

「うーん……」

学校が終わり、流れるように篤志のゲーセンへの誘いに丁重に断りを入れて家に帰った俺は、身体をベッドの上に投げ出して、部屋の天井を仰いでいた。

屋上でのやり取りのあと教室に戻ると、朝と同じように橘は隣に座った俺のことも見るでもなく、変わらない様子で授業を受け続けていた。

かくいう俺はというと、彼女が去り際に残した言葉が頭の中で残響し続けて、授業の内容なんてこれっぽっちも入ってこなかった。

結局考え続けた末に、放課後に発言の真意を問いただそうというところに落ち着いたのだけれど、篤志が絡んできた合間に彼女の姿は霞のように消え去ってしまっていたのだった。

(あいつ、なんであんなことを……)

橘は俺のことを『避けている』と言った。けれど重ねた質問には『嫌いではない』と答

えている。

俺のことを避けているのに、嫌いじゃない？

なるほど、わからん。

(意味わかんねえよ……)

ひとつの答えを知ることは出来たけれど、また新たな謎が生まれた。推理小説の探偵の気持ちってというのは、きっとこんなものなのかもしれない。

改めて俺は、橘のことを考えてみる。

あの日、ゲーセンの帰りにぶつかった女の子。あれが橘だったっていうのは、まあ間違いないだろう。問題はあのときから、なんで橘が俺のことを避け続けているか、ということか。

最初にぶつかって転ばせてしまって、声をかけたところまでは別におかしなことは無かったはずだ。

そのあと、立ち上がろうとして俺にもたれ掛った瞬間、まるで拒絶反応を起こすように飛びのいて、逃げ差ってしまった。

(……そういや、学校で逃げられたときも、俺の前で転びそうになったときだったな)

あのときも、俺に触れた瞬間にはじかれるように身体を起こして、まるで怪物でも見たような顔して橘は逃げていった。

(もしかして、俺に触られるのが嫌とか？)

今まで出会ったことはないけれど、男に触られただけで反射的に悲鳴やらを上げてしまうような、重度の男性恐怖症な女の人っていうのもいるらしいからな。橘もひよっとするとその類なのかもしれない。

(にしては、俺以外の男子とは普通に話してるんだよなあ……)

それがどうにも解せない。その事実だけ列挙したら、まるで橘が『俺』という人間個人に対して、拒絶反応を示しているように思えてしまう。

百歩譲って、そうだとしよう。俺に触られるのが嫌。じゃあ、なんでだ？

「うー、なんだよそれ」

俺に触られたらダメとか、新手的イジメかよといたくなる。新手っていうわけでもないか。

とにかくにも、俺には転校したての女子高校生に、触られるのを嫌がられてしまうような覚えが何一つないことだけは確かだ。

(なーんか、すっきりないなあ)

どうにも解消されないモヤモヤに、ベッドの上で悶えながら、

「……あ」

はたと気がついてしまう。

(俺、昨日から橘のことばかり考えてるな……)

昼休みの橘の言葉が思い出される。

『……嫌いなわけ、ない、じゃない……』

よくよく考えたらこれ、遠まわしに好きって言ってるんじゃない……？

(いやいやいや、ないない。それはないだろ！)

恐るべし男のご都合主義回路。嫌いの逆の逆は好きって、どんだけ短絡直結なんだ。

まあ、篤志の言うように、少なくとも見た目については、嫌い、じゃない。どっちかっていうと好みのタイプだ。

俺もほら、年頃の男子高校生なわけで、それなりに異性に対する興味みたいなものだって無いわけじゃない。

避けられてはいるものの、『嫌いじゃない』だなんて言われたら、篤志じゃないがそりゃ気にはなってくるわけだ。嗚呼、悲しき男の性よ。

「橘、美月……か……」

改めてその名前を口に出してみる。

トクン、と胸の鼓動のリズムが変わる。

なにか熱いものが渦を巻くように、心臓の位置に向かって体中から集まってくる。

深く、深くに、懐かしさを感じるような、不思議な感覚。

今夜も俺は、まともに眠れそうになさそうだった。

**Time UP & Give UP デシタ orz**

続きは Web で！